

日本福祉大学 2024 年度 地域連携型研究助成制度 研究報告

研究代表者 所属・職：国際学部・准教授

氏 名：カースティ祖父江

研究課題名：半田市上池区の多文化共生の実態調査・学部生の地域活動への参加の意義の検証

研究の概要

令和 6 年 4 月 1 日現在、半田市の総人口の 116,778 人のうち、4,743 人（4.1%）は外国籍である。これは愛知県の割合（令和 5 年 6 月末現在：3.97%）を上回り、愛知県における市町村において半田市の外国人人口比が現在、高浜市、飛島村、小牧市、豊橋市、豊田市などについて 17 位である。知多半島の 5 市 5 町においてはもっとも外国籍住民が多い町となっている（愛知県における外国籍住民の人口比で並ぶと大府市（23 位）、南知多町（24 位）、東浦町（28 位）、武豊町（32 位）、常滑市（39 位）、知多市（41 位）、東海市（46 位）、美浜町（50 位）、阿久比町（52 位）（愛知県 2023）。

この実態を受けて、半田市は平成 2019 年 4 月に議員提案に基づいて「半田市多文化共生社会の推進に関する条例」が制定され、半田市に住む市民が国籍を問わず暮らしやすいまちづくりを目指している。条例の目的は「総合的かつ計画的に施策を推進することにより、国籍、民族等の違いにかかわらず市民の人権が尊重され社会参画が図られる地域社会の形成を促進し、もって豊かで活力ある社会の実現を目的とする」こと（半田市 2019）であり、条例の中で「多文化共生」が「国籍、民族等の異なる人々が、文化的な違いを理解し、地域社会の構成員として対等な関係を築こうとしながら共に生きようとする社会」（同）として定義されている。条例の「基本理念」として（1）個人の尊厳が重んぜられ、個人の能力を発揮する機会が確保されることにより市民の人権が尊重されること、（2）市民が地域社会の対等な構成員として地域社会における様々な活動に主体的に参画できることが挙げられている（千頭・祖父江 2021）。また、これを受けて、半田市は 2019 年度から「多文化共生推進計画」を策定し、2020 年度に「多文化共生を力として元気なまち半田を創る計画（半田市多文化共生プラン）」を発行している。プランの基本方針や目標は次の通りである：

- ① 多文化社会を支えるひとづくり 国籍、民族等の異なる様々な市民が、互いの文化的な違いや特徴を理解し、尊重しながら、共生の意識を醸成するとともに、多様性を力として元気な地域をつくることができるように、ひとづくりを進めます。
- ② 共生のための支援 すべての市民の尊厳を重んじ、基本的人権を保障したうえで、個人の能力を発揮する機会を確保するため、合理的な配慮を通じて、安全で安心な豊かな生活を送ることができるよう、基盤整備や情報提供の充実を図ります。
- ③ 協働によるまちづくり 「国籍を問わず、すべての市民が地域を支える担い手である」との理念の下、特に、外国籍市民が地域社会の対等な構成員として地域社会における様々な活動に参加できる地域づくりを進めます（半田市 2020）。

プランの目標を満たすために、半田市は 2020 年度から日本福祉大学のまちづくり研究センター、日本語教育センター、また国際学部と協力しながら、あらゆる側面から多文化共生を推進する活動に取り組んできており、特に国際学部の留学生をファシリテーターとして市役所職員のためのやさしい日本語研修や、多国籍市民に対する交流事業が成果を上げていると評価を受けて来た。やさしい日本語研修は 2022 年度をはじめ地域住民に対する企画としても展開され、それぞれの地区の役員や住民に対するワークショップが現在にいたって 3 回実施されている。

このことを背景に、半田市の外国人住民の多くは比較的古くから半田市に在住しており、乙川地区、上池地区などでは定着している日経コミュニティに合わせて、新たに外国籍住民として転入しているベトナム人、ネパール人などのコミュニティとして挙げられる。2024 年度より日系ブラジル人の人口比が特に高いとされている上池区の役員としてブラジル国籍の方が任命されたと同時に、2023 年の上池区の夏祭りにも外国籍住民が自ら屋台を出すなど、多文化共生のまちづくりや地域交流に積極的に参加する動きがみられている。その実態をさらに理解するため、また、可能なところからその多文化共生推進をサポートするため、現在の区長さんが（国籍を問わずの）国際の学部生を地域のイベントに参加させるように依頼を受けたのが本企画の始まりであった。今までの活動の経験を活かしながら、教員や学生のファシリテーションによる地域住民の間の関係づくりや、多文化共生の課題解決に向けてのディスカッションなど、諸々の効果が期待されると思われた。

達成状況・成果内容

2024 年度の研究として、以下の活動を実施した。

(1) 半田市（上池地区）横川小学校区夏祭りでの出展 （「アジアのかき氷屋さん」）

昨年度から自発的に外国人住民が自ら出展するようになった半田市（上池地区）横川小学校区夏祭りに、5 カ国籍から構成するゼミ学生企画のお店（「アジアのかき氷屋さん」）を企画して、参加した。6 月 10 日に学生と一緒に上池公民館で準備委員会に出席したり、学生自らの出展のためのポスター作りなどを経て、8 月 3 日のお祭りに出展した。

本年度から上池地区の区長さん（共同研究員の小田さん）がこの祭りを「多文化共生祭り」として位置付け、留学生を含む本学の学生の参加を促すとともに積極的に外国人住民に参加しやすいようにポスターの多言語化などに取り組んだ。本年度の祭りには学生のお店以外に、ブラジル人が運営する NPO 団体、介護施設で働いているベトナム人、地域の交流団体などによる飲食店の出店は



図 1: 横川小学校区夏祭りのポスター

あった（図 1、写真 1 参照）。半田市長をはじめ、多くの半田市の方と交流を持つ機会になり、学生にとってとても刺激的な体験だった。



写真 1: カースティ・田中ゼミの学生と「アジアのかき氷や」（2024. 08. 03 撮影）



写真 2, 3, 4: 学生と教員が多文化交流についての聞き取り調査を実施する（2024. 08. 03 撮影）

(2) 横川小学校区夏祭りにおける聞き取り調査

かき氷を売しながら、横川小学校区夏祭りに参加している住民の方に口頭で簡単な聞き取り調査を実施した（写真 2, 4, 5 参照）。調査では、外国籍住民と日本国籍住民を対象にそれぞれ「日本人の友達はいますか?」、「外国籍の友達はいますか?」と聞き、該当する答えにシールを貼ってもらった。

本調査の背景には 2024 年度で本研究代表者が策定委員として参加させてもらっている半田市全体の第 2 回多文化共生推進プランの策定を控え、2023 年 10~11 月に実施したアンケート調査がある。この調査において、日本国籍住民、外国籍住民にそれぞれ同じ問いが設定され、市民全体を対象とした調査において、半田市に住んでいる日本国籍住民のうち「外国籍の友人・知り合いはいる」と答えたのは 4.6%（市外の友達を含めて 5.8%）であり、外国籍住民のうち「日本人の友達・知り合いがいる」と答えたのは 63.2%であった。半田市全体を対象とした調査結果と上池地区住民を対象とした調査結果に差があるかどうかを明らかにするために聞き取り調査を行

うことにした。夏祭りで実施した聞き取り調査において、上池地区に住んでいる日本国籍住民回答者の 67.9%は「外国籍の友達がいる」と答え、上池地区在住の外国籍住民の 63.9%%は「日本人の友達がいる」と答えた。特に日本人の外国籍住民との交流の程度が半田市全体の統計をはるかに上回った。

この差の大きさを影響する、いくつか背景要因が考えられる（そもそもお祭りに参加する住民は外国籍住民との交流を肯定的に考えていることや、学生が聞き取り調査をしたため、依然として回答者の年齢が若く、学校で外国籍の友達ができたと考えられることなど）。いずれにしても、上池地区に住んでいる日本人住民は半田市全体と比較して外国籍住民との交流が活発であることが示唆される。以下の表 1、図 1～3 でこの調査の結果を示す。

表 1：上池地区の聞き取り調査(2024. 08)の結果と
半田市のアンケート調査(2023. 10～11)との比較

	上池地区在住 日本国籍 (n=53)	その他在住 日本国籍 (n=13)	上池地区在住 外国籍 (n=36)	その他在住 外国籍 (n=20)	半田市全体 日本国籍 (n=753)	半田市全体 外国籍 (n=172)
外国籍・日本国籍の友達がいる	67.9%	38.5%	63.9%	57.5%	4.6%	63.2%
外国籍・日本国籍の友達がいらない	32.1%	61.5%	36.1%	42.5%	95.4%	26.8%

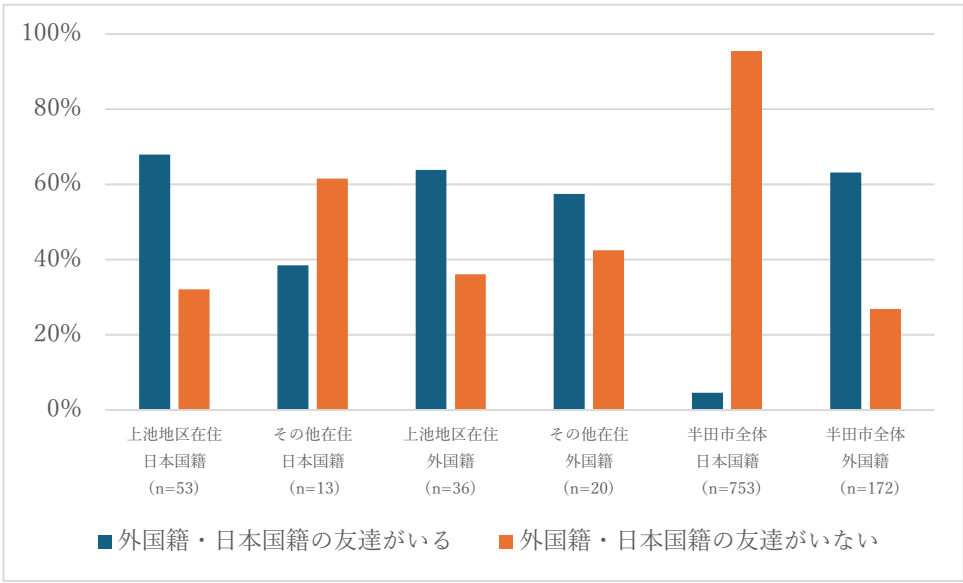


図 1：上池地区の聞き取り調査(2024. 08)の結果と
半田市のアンケート調査(2023. 10～11)との比較



図 2, 3: 上池地区に住んでいる人・住んでいない人への聞き取り調査表

(3) 地域のやさしい日本語ワークショップ

2022 年度から半田市は市役所の職員に対する「やさしい日本語ワークショップ」を日本福祉大学に委託しており、本研究代表者とゼミに所属する留学生がファシリテーターとして年 3 回程度職員研修を実施している。2023 年度から半田市の依頼でこのワークショップを地域に向けても実施したいとの依頼も受け、2023 年度には 2 回（乙川公民館と神池の公民館にて）、2024 年度にはニコパルという公共施設で、乙川・上池地区の自治区の役員や住民を対象としたワークショ

表 2：2025.01.28 に実施したやさしい日本語ワークショップ参加者アンケートのまとめ

多文化共生に関する関心が深まったかどうか	平均点 3.5 (n=7) (4 点：とても深まった～1 点：深まらなかった)
外国人と接する機会があるか	「ある」5 名 「ない」2 名
「接する機会ある」と答えた参加者の接触場面	町内会・小学校・コンビニ・自治会加入をお願いする時・自治区の中で・自治体のコミュニティ
課題として挙げられたこと	ゴミ出しなど、外国人の方の日常生活がスムーズに行くように周知をもっていかないといけないと思います (総合評価 3 点) どうしたら繋がるか? そのきっかけをどうつくるか? (総合評価 4 点) 外国人にこころを開くことの難しさ (総合評価 3 点) ことばの壁 (総合評価 4 点)

ップを開いた。2023 年度は 17 名（乙川）と 15 名（上池）の参加者がいた。それに対して 2024 年度のワークショップは地域からの参加者は 7 名で少なかったが、夏祭りの出店に関わった留学生もワークショップのファシリテーターとして参加し、地域住民の間のコミュニケーションの課題などについてさらに深くディスカッションできたと思われる（写真 4, 5 参照）。

やさしい日本語ワークショップに対する参加者の評価は表 2 でまとめる。



図 4、5：地域向けのやさしい日本語ワークショップの資料と、
留学生とディスカッションをする自治体の役員など（2025.1.28 撮影）

(4) 上池地区の区長（共同研究員）とのインタビュー

上記の研究活動から、半田市の上池地区は半田市全体の中でも多文化共生が進んでいると示唆する結果が得られたと思われる。その現状をさらに知りたく、本研究の代表者は 2025. 01. 23 に共同研究者と務めてくださった上池地区区長の小田さんに 90 分をかけてインタビューを実施した。主に、上池地区において、外国人住民にとって暮らしやすくするための工夫について聞いた。小田さんは 7 年間自治体の区長を務めている。インタビューで得た答えの一部を以下にまとめる。

1. 外国籍住民が地区の自治会への参加を促す工夫

以上の通り、2023 年度にはブラジル国籍の住民が上池地区の自治会の役員となり、2024 年にはその方が町内会の会長でさらにフィリピン国籍の住民一人が副会長となったという事例が上池地区にある。このことは未だに日本の地域で比較的に珍しい状態で、そうなるまでなにかと「外国人に参加しやすい」工夫をされたかと聞いたところ、「そもそも日本人もこういう自治会などの組織に参加するハードルが高い現状ではあるから、まずは会議の回数を減らして、参加する負担をできるだけ軽くすることにした。そうすることによって、日本人だけではなくブラジル国籍の住民の方も参加するようになったからよかったと思う」と答えた。さらに、役員会の資料を翻訳機能を使ってポルトガル語などに訳したりするような工夫もしていると答えた。全体的には「日本人が役員になっているところと同じぐらいうまく回っているという印象がある」という。

2. 地域のイベントに外国人の参加を促す取り組み

「外国人が楽しいと思うようなイベントをこちらで企画するだけだと外国籍住民が来てく

れたとしても「お客さん」になる。「お客さん」として来てもらうのではなく、「企画を考える側になってもらう」工夫をしているという。例えば、2024 年の自治区の運動会では、玉入れのコーナーは外国人住民が責任を持って、企画運営を自らしたという。そうすることによって小田さんは「お客さんではなくて、一緒に地域を作っている一人だ、という気持ちになるし、外国人住民も呼びやすくなる」と言った。

3. 多言語化の AI ツールややさしい日本語を積極的に使う

「やさしい日本語ワークショップに参加することによって、たとえば日本語でコミュニケーションをする時には主語をしっかり文に入れて、誰がなにをすべきかとはっきりさせるとわかりやすいということが分かったし、漢字がたくさん入っている言葉より和語や訓読みで読む言葉のほうがわかりやすいということが実感できたからよかったです。また、google 翻訳などの機能の精度が毎年上がっているから、資料を作る時にそういったツールはどんどん取り入れている。一旦、出てきた文字をまた google 翻訳に日本語にし直して、うまく伝わればこれは使える！という感じでどんどん利用している。コミュニケーションは本当に大事なので、積極的に使えるものを使おうと考えている。」

4. 外国籍住民の生活のリズムを理解する

「色々見ているうちに気づいたけど、ブラジルの方は生活する時間帯がちょっと日本人と違っていたり、風習が違うことが分かった。しかし、逆にいうと彼らの方が日本人よりもちゃんと明るく接してくれるっていうか、日本人に「おはようございます」ってもう帰ってこないけどブラジルの方に「おはようございます」って言ったら返してくれるとか。そういう点では、マイナスに捉えてばかりいられないと思うし、これから外国籍の方が増えるからにはその生活の違いを少し考えないといけないかもしれないと思った。上池地区では、たとえば、前まではゴミの出し時間がとても厳しく、あるゴミは月曜日の 8 時までとか、あるゴミは水曜日の 8 時までとかになっていたけれども、外国籍の人だけでなく日本人もだんだん守れなくなっているから、我々の方で、正しい場所でさえ捨ててくれば、365 日 24 時間いつでもゴミを捨てることができるように変えた。そうすることによってみんなの負担が減るし、みんなのイライラが減るよね。」

5. 「仲良くするしかない」という考え方

課題などがまだたくさん指摘される地域での取り組みではあるが、小田さんは「お互いに外国人住民と日本人住民が警戒しあってもしかたがない。不安があるのは理解しているけど、同じ地球だから仲良くしていくしかない、というレベルに持って来れると一番ベストだね。そういうきっかけをどんどん作っていくしかないと思う」と語った。

以上は 90 分のインタビューからの一部でしかないが、区長の創造的なアプローチや努力に

よって少しずつ多文化共生が成功的な方向に向かっていることが確かに窺える。「外国人のために〇〇をする」というより「みんなにとって地域生活の参加がしやすくなるための工夫」という考え方が中心だが、明確に外国籍住民にとって上池地区が住みやすい「地元」になっていると考えられる。今後、こうした取り組みが「わかりやすい多文化共生のアプローチ」としてをさらに広く紹介されると良いと本研究の代表者が強く思った。

以上